

デイヴィスの「製鉄工場の生活」に見る 移民工場労働者の環境

藤 江 啓 子

はじめに

レベッカ・ハーディング・デイヴィス (Rebecca Harding Davis, 1831-1910) の「製鉄工場の生活」(“Life in the Iron Mills,” 1861) は、アメリカにおける産業化初期の工場労働者の酷使とそれに伴う環境問題を扱った作品である。例えば、ローレンス・ビュエル (Lawrence Buell) は『環境批評の未来』(*The Future of Environmental Criticism*) において、この作品をハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の「乙女たちの地獄」(“The Tartarus of Maids,” 1855) と共に、「産業化初期のヨーロッパ系アメリカ人が、工場における白人労働者の酷使を描いた」(119-20)、広義の「環境正義の文学」(119) としてあげている。デイヴィッド・レイノルズ (David Reynolds) は「『製鉄工場の生活』は労働者階級の惨めさを描いた力強い説明で独特の暴露小説として復活した」(411) と述べる。

また、『アメリカ文学ヒース・アンソロジー』(*The Heath Anthology of American Literature*) において、ジュディス・ローマン・ローヤー (Judith Roman-Royer) とエレイン・ヘッジズ (Elaine Hedges) は、「製鉄工場の生活」はアメリカ文学の新しい主題を捉えた先駆的功績、「国家の工場における産業労働者の過酷な生活」であると紹介する。そしてメルヴィルの「乙女たちの地獄」がそれ以前ではあるが手短かに「アメリカの風景を変容させる産業構造の

暗い内部を洞察する」(Vol. B, 2836)のみであると述べる。「製鉄工場の生活」はアメリカの産業資本主義初期における労働者の生活と仕事場を取り巻く環境問題——汚染、安全、健康、衛生、貧困、労働時間、ジェンダーを取り扱った初期の作品であり、その点を評価されながらも、十分に考察されることなく今日に至っている。

デイヴィスの描く製鉄工場では、移民や女性が劣悪な条件と環境の下で働く。主人公ヒュー・ウルフの父親は、ウェールズ出身で、以前にはコンウォールの錫鉱山で働いていた移民労働者である。ヒューは鉄道の線路を造るカービー・アンド・ジョーンズという圧延工場の溶鉱炉で攪鍊夫や溶鉱炉番として働いている。デボラはヒューのいとこで、同じくウェールズ出身の女性である。彼女は綿工場で糸巻き機の職工として働いている。アイルランドからの移民も多く、窓からは「酔ったアイルランド人の群衆」が「近くの町、リンチバーグで作られたタバコを吸っている」(11)のが見える。ここでアイルランド人の群衆が労働者階級であり、社会改革期のアメリカにあって、飲酒、喫煙をしていることがわかる。また、ヒューが心を寄せるジェイニーはアイルランドからの移民である。製鉄工場は「悪魔の住処」(20)と呼ばれ、地獄のイメージを付与されている。以下、産業化初期のアメリカにおける移民工場労働者の環境という視座から作品を読み解く。

作者、語り手、読者

デイヴィスの「製鉄工場の生活」は『アトランティック・マンスリー』(*The Atlantic Monthly*)誌に最初掲載された。『アトランティック・マンスリー』誌は1857年に、エマソン、ロングフェロー、ホームズ、ローウェル、ホイットィアー、ハリエット・ピーチャ・ストウらによってボストンで出版された雑誌である。雑誌の創設者同様、デイヴィスも中流階級出身のエリートであった。そして読者層も教養のある知的エリートであった。

中流階級出身デイヴィスが描く労働者階級の生活は、同じく白人中流階級出

身のストウ夫人が『アンクル・トム的小屋』(Uncle Tom's Cabin, 1852)において描く黒人奴隷の描写のように、所詮感傷的なものにすぎないという指摘もある(Lang 128-42)。しかし、この作品は産業資本主義初期の労働と環境という問題を移民や女性の観点から扱った作品であり、エリート知識人読者を労働者の世界に誘うものである。

デイヴィスを再評価し、伝記的解釈をしたティリー・オルセン(Tillie Olsen)によると、雑誌社や読者からの評判はよかったという。デイヴィスがボストンを訪問した際、『アトランティック』の人々、すなわちブラーミンたちに敬意を表され、賞賛され、高く評価されたという(Olsen 103)。セシリア・ティチ(Cecelia Tichi)も「『製鉄工場の生活』は労働条件について中流階級を教育することを求め、合衆国での産業小説のジャンルを確立した」(21)と述べる。

語り手は読者に物語の冒頭において、次のように語りかける。

私はあなた方にこのようにして欲しい。あなた方の嫌悪感を隠し、きれいな衣服にはかまわず、私と一緒に降りてきて欲しい。ここ、この煙と泥と悪臭のなかへ。あなた方にこの物語を聞いて欲しい。この悪夢の煙のなかに、何世紀も黙ったままの秘密がある。私はあなた方にそれを現実と捉えてほしい。あなた方、エゴイスト、あるいは汎神論者、あるいはアルミニウム主義者は、丘をまっすぐに進むのに忙しく、はっきりとは見ない。それはここの人々が答えようとして気が狂い死んでいったこの恐ろしい疑問。私はこの秘密を言葉にしようとは思わない。それは黙して語らない。(13-14)

語り手、読者ともに中流階級であることが、「きれいな衣服」「降りる」といった描写からわかる。また、読者を「エゴイスト」「汎神論者」「アルミニウム主義者」とし、自らの事に忙しく、労働者の生活は見ないとも言う。

ジーン・ファエルザー(Jean Pfaelzer)も指摘するように、「製鉄工場の生

活」は、デイヴィスが黙する「秘密」を語る試みであり、産業労働の現実の言語に絶する本質を表現するのに芸術的言語を模索する努力である(24)。

作品は現在のウェスト・ヴァージニア州、ホイーリングを舞台にとっている。ホイーリングでは、繁栄する中流・上流階級の人々のみが小奇麗な家々のある地区に住んでいる。そのことは1850年代初頭に『写真の合衆国』(*The United States Illustrated*) に発表された「ヴァージニアのホイーリング」(“Wheeling in Virginia”) と題する美しいリトグラフ版画に表れているとロバート・E・エイブラムズ (Robert E. Abrams) は指摘する(119)。くっきりとした輪郭の家々が並ぶ小さな住宅地で、安定と秩序を物語る幾何学的に正確な形態が描き出されている。

それに反してデイヴィスの暗く不確かな美意識は、曖昧な基調と、見るのが困難な本質の陰気な環境に及ぶという (Abrams 119)。そこでは「ちらちらするガスがあちこちと不確かな空間を照らすのだった」(19)。ものは「壊れ」「散らかり」「汚く」「ばらばらになっていた」(12-13) と描写される。この薄暗く腐朽するところでは、目に見えるものの文化的に書かれたテキストは断片的となり、見るには不確かで困難となるとエイブラムズは続けて言う(119)。

ファエルザーも「超絶主義は男性的エゴイズムと内部崩壊する精神主義の哲学であり、文学を平凡なものの上に浮かべる」(25) とする。「平凡なもの」は「現実」と置き換え可能であり、「工場町で引き起こされる社会的環境的腐敗の責任は一部にはロマンティズムの自己中心的な傾向にあり、それは『アトランティック・マンスリー』誌の読者や工場の訪問者といった中流階級を盲目にし、産業化によってもたらされる個人的・環境的破壊の現実を見えなくしている」と指摘する(40)。良好な環境に住む中流・上流階級は超絶主義やロマンティズムの傾向を持ち、現実のスラムの世界へ目を向けることはないのである。

デイヴィスは、超絶主義やロマンティズム的傾向を持つ中流・上流階級の人々には不確かで見えない腐朽した暗いスラムの世界、沈黙した秘密の現実の世界、リアリズムの世界へ読者を誘うのである。

歴史的背景

デイヴィスは1836年、5歳の時に両親と共にホイーリングにやってきた。ホイーリングは今日ではウェスト・ヴァージニア州にあるが、当時は南北の境界州であるヴァージニア州にあった。オハイオ川に臨み、ホイーリングはガラスや鉄製品の製造のための鉄や石炭、白砂を多く産出した。シャロン・ハリス(Sharon Harris)は作品の歴史的背景を、「ホイーリングはかつて農業共同体であったが、急速に産業化に向かった。1836年には市の端に鋼鉄工場が象徴的に建設され、それは彼女[デイヴィス]の想像力を捉えただけでなく、彼女にアメリカの生活の現実を暴露することが必要だと思わせた」(21)と紹介する。

クローディア・ジョンソン(Claudia Johnson)も作品の歴史的・社会的背景を簡潔に捉えている(63-66)。彼女によるとホイーリングは南部と北部を結ぶ交通の中心地であった。19世紀初めには142マイルのナショナルロードが開通し、1840年代後半には、バルティモア・アンド・オハイオ鉄道が市に開通した。1812年戦争後、産業はホイーリングで栄え、1832年にオールド・トップ・ミルとして創設された有名な工場は釘を生産した。そこでホイーリングは「釘の町」というニックネームで呼ばれるようになった。

1840年代と50年代には製鉄所が建設された。主なものは圧延工場であり、そこで線路のような鉄製品を生産するために、大桶のなかで銑鉄を火で精錬した。1860年までに、ホイーリングの圧延工場の数は合衆国で3番目に多いものとなった。工場の片側には精錬炉と溶鋳炉があった。ヒュー・ウルフのような攪錬夫は、300ポンドもの溶解した銑鉄を精錬された鉄のボールになるまで約30分間攪拌した。一般に攪錬夫は乾燥した熱のために、熱射病、極度の疲労、筋肉の痙攣、目の悪化、皮膚の裂傷を患った。

ガラス工場や製鉄工場で燃やす石炭による汚染はひどいものであった。硫黄の煙が労働者の肺を侵し、何マイルも空気を汚染した。石炭の煤が木々や建築物を覆い、煤からの逃げ場所はなかった。昼間でも太陽はほとんど見えず、夜は星が見えなかった。労働者の多くは呼吸器系の病気、肺炎、慢性肺炎、ある

いは有毒な煙や鉱物の粒子を吸い込んだために起こる肺病を患い、死んだ。

工場町では、移民労働者とりわけアイルランド系が多かった。アイルランド系移民は鉄道で働く者が多く、ヒューや彼の父親のようなウェールズ出身の移民は、典型的に圧延工場で働いた。アイルランド系の女性は綿工場で働く者が多かったが、その他の民族の女性も綿工場には多かった。ハリスによると、綿革命はプランテーション農業を営む南部においても産業化した北部においても、発展のための重要な要因であった。増加するアイルランド系移民に対しては反感も強く、1850年代に移民排斥団体であるノーナッシング党が結成された。

また、デボラの境界州での労働は南部の奴隷制と関連づけられる。ハリスによると、1831年までには58,000人の綿工場の労働者のうち約70%を女性が占めた。これらの女性はほとんどが白人であったが、彼女たちの生活は女性黒人奴隷の生活と変わらなかった。綿の製造が合衆国産業の第1位を占めていたにもかかわらず、劣悪な労働条件や労働環境は改善されないままであった (Harris 32-33)。

エイブラムズもデイヴィスの「製鉄工場の生活」とフレデリック・ダグラス (Frederick Douglass) の自伝を比較考察する際に、南北戦争以前のアメリカにおける奴隷制と労働者階級の貧困の類似を指摘し、北部の資本主義と南部の奴隷制のイデオロギーには共通するもの、「共犯」関係があるとする (Abrams 108)。

鉄工業での最初の労働者ストライキは、1835年フィラデルフィアで行われたが、労働時間を1日10時間に短縮することを求めるものであった。1850年代になって始めて攪乱夫がピッツバーグで労働組合の組織化を始め、賃金の改善などを求めた。1861年には製鉄労働者の平均賃金は週12ドルにまで改善された。ホイーリングの攪乱夫は1860年代には組織化の試みをし、デイヴィスの小説が発表されて6年後に、2つの労働組合が創られた。真の意味において、この小説は南北戦争中やその後にエスカレートした労働条件の改善を求めた大きな労働闘争の下準備となった (Johnson 65-66)。

また、貧困、飲酒、喫煙、売春、犯罪、無知文盲といった社会問題に対して、改革運動が進められており、その担い手は主にプロテスタントの中流階級であった。1826年にはボストンで禁酒教会（American Society for the Promotion of Temperance）が設立され、1874年にはキリスト教婦人矯風会（Woman's Christian Temperance Union）が結成された。さらに、日曜学校組合の設立、監獄、精神病院の設立、公教育の充実が計られた。デイヴィスは特定の改革運動とは関係なかったが、「教育、社会改革、そしてキリスト教プロテスタントの信仰を通して、社会の改善を主張した」（203）とティチは指摘する。

環境汚染

デイヴィスは産業化がいかに自然環境を破壊し、人間の肉体と精神を破滅させるかを作品において描いた。大気汚染も深刻なものとして描かれる。「空は夜明け前に沈み、濁り、のっぺりと広がり、動かない。空気は重く、押し合う人々の息でひんやりとしている。私は息が詰まりそうだ」（11）と、語り手は製鉄所のある町の曇った日の描写で物語を始める。煙や煤は次のようにあたり一体を覆う。

この町に特異なのは煙だ。煙は製鉄工場の巨大な煙突からゆっくりと折り重なるようにむっつりと出てくる。そして泥深い通りの黒く汚い水溜まりに降りる。波止場にも煙が、薄汚れた小舟にも煙が、黄色い川にも煙が。家の玄関、2本の色あせたポプラ、通行人の顔に油でねとねとの煤となってべったりとくっついている。（11）

工場からの汚染は、天使像や鳥かごのなかのカナリヤといった自然や芸術品も汚す。天使像の翼まで「黒く凝固した煙」（12）で覆われている。また、「そばの鳥かごで寂しく鳴く汚れたカナリヤ」（12）のイメージは、伝統的なパストラルリズムや超越主義の含蓄を挫くものである。「緑の草原と日光はずっと昔

の夢で、ほとんどすり切れてしまったと思う」(12)と語り手は語り、緑のパストラリズムは夢にすぎないことを述べる。ハリスは、ここにおいて効用を失った「夢」は、エマソンの超越主義の象徴であると指摘する。デイヴィスは、超越主義をアメリカの生活を潜在的に破壊する哲学であると非難し、現実へ目を向けることの重要性を説いたのである (Harris 30)。

川も汚染され、「どんよりとし黄褐色」で「小舟や石炭船の重みで疲れ、のろのろと」(12)流れる。語り手は川について、「黒人のような川は毎日毎日荷物を奴隷のように運んでいる」(12)と空想する。ここで、労働者の重労働と奴隷労働の類似が川の流れに喩えられているのが注目される。

川の流れは工場労働者の流れとも重ね合わされ、「人間の生活のゆっくりとした流れが夜も昼も巨大な工場へ向かっている」(12)と述べられる。しかし、川の流れと工場労働者の流れの重ね合わせは、語り手のとりとめもない空想であり、「ここで川の流れがよどみ、汚らしいからといって一体なんだ？」と語り手は、現実を直視し、自問する。

川を越えた向こうには、パストラルの風景があり、そこは中流・上流階級の人々が住むところである。川の向こうの方にはパストラルの風景が待っていることを川は知っていると、語り手は次のように言う。「向こうには香りの良い日光が待っている——趣のある古い公園、林檎の木の柔らかい緑で薄暗くなり、バラで赤く輝く——大気、草原、そして山が」(13)。

しかし、下層労働者階級にとっての現実には快適ではない。「今通り過ぎたウェールズ出身の攪鍊夫の未来はそれほど明るくない。彼の汚い仕事が終わった後、泥だらけの墓場の穴にしまい込まれ、その後は、——空気も、緑の草原も、珍しいバラもない」(13)と語られる。パストラルの風景は、工場労働者には拒否されているのである。

蝕まれる心身

作品において、工場労働者は心身ともに蝕まれ、産業資本主義の犠牲者とし

て描かれる。例えば、製鉄工場の労働者は機械に支配される。「製造業の町の住人でさえ、毎年毎年絶えず作動する巨大な機械の機構によって、労働者の身体が支配されることを、知る者は多くない」(19)と述べられる。機械の管理下にある労働者階級の者だけが、隠れた秘密の世界の地獄のような機械の力を知っているのである。中流・上流階級の人々は労働者階級のスラム街での生活を知らずに暮らしている。

さらに、労働者の労働の厳しさが軍隊の歩哨に喩えられ、次のように描かれる。

工場の労働者は軍隊の歩哨のように互いに助け合うように規則的に寝ずの番を交代する。夜も昼も作業は行われ、眠ることを知らないエンジンは呻き金切り声をあげ、金属が溶けて燃え立つように溜まり、沸き立ち、波打つ。1週間に1日だけ、公的批判に対する措置として、火は一部覆われるが、時計が真夜中の12時を打つとすぐに、大きな溶鉱炉が怒り狂ったように再び沸き立つ。喧噪が再び息もつかぬ勢いで始まり、エンジンは『苦悩する神々』のように、すすり泣き悲鳴をあげる。(19)

ここでは、機械は擬人化されるだけでなく、神格化されている。

また、工場労働者の心身は次のように煙や煤で黒く汚染される。

鈍く、酔っぱらった顔つきでうつむき、苦痛あるいは狡猾さでここかしこ敏感になっている男たちの群れ。煙と灰で皮膚も筋肉も肉体が汚れている。夜中、金属の煮え立つ大釜の上に身をかがめ、昼は泥酔と非行の巢で休み、生まれてから死ぬまで煙と油と煤で充満した空気を吸い、魂にも体にも悪い。(12)

工場労働者の身体は汚染のみならず、飲酒、貧困による栄養不良、過酷な労働によって蝕まれていたのである。工場労働者たちの貧しい生活が食物や住居

などでわかり、それは「彼らの階級にふさわしい生活」(15)であるとして、次のように描写されている。「絶えざる労働、犬小屋のような部屋での睡眠、腐った豚肉と糖蜜を食べ、酒を飲む——神と酒造家だけがどんな酒か知っている」(15)。彼らが住む家は6家族が借りており、ウルフ家は地下室の2室に住んでいた。「土の床は緑のぬるぬるした苔で覆われ」、「強い悪臭を放つ空気でお息がつまりそう」(16)であった。

ヒューは、すでに「男らしい力や本能的な活力を失い、筋肉は薄く、神経は弱く、顔は（柔弱な女性のように）やつれ、肺病で黄色くなっていた」(24)。デボラは「体に障害があり、背中が曲がって」(17)、「青ざめた」顔をし、「唇はもっと青く、両目はもっとうるんでいた」(16)。ジェイニーの顔は「やつれ青ざめ、眠気と餓えで両目は重い」(17)と描写される。

ヒューについては、彼は自らの「汚れた体、もっと汚れた魂」(30)を鏡に写し出されたかのように見る。そして、「泥が硬くこびりついた赤いシャツ」の腕のところを引きちぎって出てきた「下の肉は油と灰でどろどろだ。その下の心はどうなっている！ そして魂は？」(40)と語り手は述べる。

工場労働者の魂も肉体同様に飢える。「彼らの生活の恐ろしい悲劇……通りを行く酔ってたわいなくなった顔の下に毎日出会う魂の飢餓、生きてはいるが死んだも同然の現実」(23)と描かれる。この箇所に対し、オルセンは、「文学的アメリカの意識において、それまでは暗い悪魔的な工場はなかった。……産業を考慮すると、パストラル的調和への侵害であり、物質主義の精神への脅威であった」(88)とコメントする。

女性工場労働者（像）

デボラはヒューと同じくウェールズからの移民であり、ヒューが作成するコールの女性像と共に、女性工場労働者についての問題を提起している。

デボラは繊維工場の糸巻きのところ立ち1日に12時間働く(19)。これはメルヴィルが「乙女たちの地獄」で描く製紙工場での女性労働者の労働時間と同

じである。メルヴィルの語り手が訪れた製紙工場の経営者は、既婚女性よりも未婚女性の方が労働者としては望ましいとし、「毎日毎日、1日12時間、365日」絶えず働く人以外には誰も雇用したくないと言う（Melville 334）。因みに、当時の工場労働者の1日の平均労働時間は11～13時間以上であった（Eisler 28）。

デボラの夕食は、冷たくなったゆでたジャガイモと1パイントのコップにはいったビールで、それも朝から何も食わず夜の11時になって初めて食べる食事であった(17)。彼女の「生彩のない生活、苦痛と飢えを圧倒する覚醒した無感覚、彼女の階級の典型」(21)と描かれる。

この無感覚の描写は、同じく移民工場労働者の苦境を描いたアプトン・シンクレア（Upton Sinclair）の『ジャングル』（*The Jungle*, 1906）からの次の一節と通底するものである。

麻痺させる、残忍な仕事だ。彼女〔エルゼビエタ〕に考える時間も何をする力も残さなかった。彼女は彼女が動かす機械の一部であり、機械には必要でないあらゆる能力は押しつぶされて消滅する運命にあった。残酷でつらい単調な仕事にはただ一つ慈悲があった——それは彼女に無感覚の贈り物を与えた。少しずつ彼女は麻痺へ沈んだ——彼女は沈黙した。(168)

ここで、ワイ・チー・ディモック（Wai Chee Dimock）の議論が注目に値する。ディモックは、デボラの最大の苦痛は身体的な剥奪や欠乏に由来するのではなく、ある種の優しさで扱われることに由来すると述べる。それゆえ、彼女は階級の典型かどうかは保証されないとする。デボラは物質的な諸条件の転写の成り下がりではないことを、次の文章が示していると指摘する（Dimock 95）。

活気のない、かすんだ目、そして鈍く疲れきったように見える顔の下に、……物語はない。また誰もそのかすかな印を読み取ろうともしなかった。

確かに、半裸の溶鉱炉人夫のウルフはそうしなかった。それでも彼は彼女に優しくかった。優しいのが彼の性質で、地下室に群れるネズミにまで、彼は優しくかった。彼女にも同じように優しくかった。彼女はそのことを知っていた。そして彼女の顔が無関心と無感動なのは、下層で無気力な生活のためというよりは、そのことを知っていたからであった。(22)

デボラの無感覚、無感動、無関心は下層労働者階級の生活だけが原因ではないことが、続く文章からもわかる。

この死んだような空虚な顔つきは、この上なくすばらしく、上品な女性の顔にも時々忍び込む。それも暖かな夏の日のなかで。繊細なレースと明るいき笑いの下に隠された耐え難い孤独の秘密を推測できる。この女 [デボラ] には温かさも、輝きも夏もない。そこで無感覚や空虚が彼女の顔を絶えず蝕む。(22)

ここにあるのは、階級には関係なく、愛を奪われた女性の孤独と空虚である。デボラはヒューを愛するが、ヒューの魂は「彼女の歪んだ体に対する嫌悪でうんざりしている」(23)。デボラは愛するヒューに喜んでもらいたいと思い、ヒューから「真の心の優しさを得る」(21-22) ことを望むが、その望みが叶うことはない。ヒューが愛するのはジェイニーである。ヒューのデボラに対する優しさは、特別な好意によるものではなかった。ネズミに対する優しさと同じ優しさをヒューに示され、デボラは感謝するどころか一種の気難しさを見せる。デボラの魂は「苦痛と嫉妬」(23) に苦しむが、その苦しみは中流階級である読者の心の苦しみの「旋律と1オクターブ違うだけで」大差はない(23)。

しかし、デボラには苦痛を受容する無尽蔵の能力がある。これは一見嘆かわしい事実ではあるが、見方を変えると、デボラにハリエット・ファーリー (Harriet Farley) やハリエット・ロビンソン (Harriet Hanson Robinson)、ルー

シー・ラーカム (Lucy Larcom) が報じた陽気、快活、愉快に似た何かを与えるとデイモックは言う (Dimock 95)。

彼女たちは、中流階級女性が家庭生活を重要視する家庭小説が流行する時代にあって、女性工場労働者の生活を肯定的に描いた。ファーリーは『ローウェル・オフアリング』(*The Lowell Offering*) の書き手のひとりであり、ロビンソンは『機織と紡錘』(*Loom and Spindle*, 1898) を、ラーカムは『ニューイングランドの女性たち』(*A New England Girlhood*, 1889) を著した。彼女たちが描く女性には、家庭崇拜のイデオロギーの束縛から解放され、貧しいながらも自立する逞しさがある。

さらに、デボラは工場での鉄の燃えかすである灰との関連で描かれる。彼女は「灰の山」(34) の上で眠る。ヒューはデボラに「灰の山に横たわって眠れ」(21) と言う。灰は工場労働者に与えられた唯一の温もりであり、社会の進歩によって人間が受ける被害を象徴的に表す20世紀の文学的モチーフであるとハリスは指摘する (35)。

灰による惨めさと不毛性は次のように強調される。「弱々しく、汚いボロのように灰の上に横たわり、彼女は確かに惨めに見えた。希望のない不快さと隠された犯罪の場面を飾るにはふさわしくないとは言えなかった」(21)。語り手は、我々は「死で妊娠した」(14) 世界へ入っていくと述べるが、デボラの姿がその世界を表している。彼女はヒューを愛しているが、その愛は報われることはない。ヒューの愛はジェイニーに向かい、灰の山に横たわって眠るデボラのゆがんだ体が妊娠することはないからだ。

しかし、この作品における灰は不毛のなかで温もりを保っている (Harris 35)。この温もりが「デボラの手足にしみ込み、痛みと悪寒を和らげた」(21) からである。灰の温もりだけが、デボラに与えられた唯一の温かさなのである。

ヒューは休憩時間に、女性労働者の像をコールと呼ばれる鉄くずをもとに彫刻する。コールの女性像は次のようである。

そのなかには美も優雅さもない。裸の女性で、筋肉質で、労働で堅くなり、力強い手足は何か痛烈な切望でみなぎっている。ある思いがそのなかにある。堅く張り詰めた筋肉、何かをつかもうとする両手、飢えたオオカミのような野性的で切望するような顔のなかに。(32)

コルセットに身を固め、母性の役割を与えられるのが当時の中流階級女性の典型であった。それに対し、デイヴィスは女性労働者像を描いた。それは、中流階級のロマンティシズムへの批判とも受け取れる。メイ博士もこの像を見て、「この骨張った手首、足の甲の引きつった腱をみよ。労働者の女性だ。彼女の階級のまさに典型だ」(32)と叫ぶ。

コールの女性労働者像の野性的な切望に物質的な条件を読み取ることは容易である。また「飢えたオオカミ (wolf)」とヒュー・ウルフ (Wolfe) の語呂合わせを考えると、作者ヒューの飢えを重ね合わせることも可能である。しかし、柔弱でやつれたヒューが、力強い女性労働者像を作成したのには、別の理由がある。自らの心身の弱さを認め、自らに欠く強さを像に込めたかったのではないか。

「コールの女性は飢えている」とヒューは言う。しかし、食べ物に飢えているのではないと言う(33)。ミッチェルも「肉体には飢えの兆候はない」(33)と言う。それでは何に飢えているのか。ヒューは「わからない。……なにか生きていくのに必要なもの」と答える。ハリスはコールの女性が渴望するものは、ヒュー・ウルフの愛情であるとする(37)。ここにおいてコールの女性はデボラと重なりを見せる。コールの女性像には、デボラ同様、苦境を受容する能力と「力強さ」があり、ラーカムをはじめとする一連の女性作家が描く女性労働者の力強さや逞しさの系譜を引くものがあると言える。家庭崇拜のイデオロギーの下、家庭小説が流行した時代に、女性労働者を肯定的に描く文学が出現していたのである。

労働環境の改善

労働環境の改善のために、デイヴィスは社会改革の可能性を提案する。デボラがミッチェルの財布を盗んだ夜、ヒューの仕事場を訪れた人々は社会改革について議論する。ミッチェルは「高い賃金を求めてストライキを起こす」(38)脅威について言及し、さらに次のように述べる。「改革は必要から生まれるので、哀れみからではありません。……いつの日か痛切な必要から光りをもたらす者が現れます——彼らのジャン・パウル、彼らのクロムウェル、彼らの救世主が」(39)。

メイ博士もこの考えを受け入れ、「これら貶められた魂が上昇するために力が与えられますように」(39)と祈る。ミッチェルをはじめとする中流階級の人々の環境改善の究極的な解決方法は信仰であったのだ。デイヴィスは中流階級のキリスト教信仰を偽善的であるとして批判する。彼ら中流階級は「キリストの慈悲の優しい心で労働者のあいだに入っていったけれど、結局は彼らに憤慨し、冷淡になって帰ってきた人々」(15)であるからだ。

ところが、信仰は、語り手、ひいては作者デイヴィスの環境改善のための解決方法でもあった。それは、光と闇、昼と夜というキリスト教的二元論によって示される。語り手は小説の最後に彼女がこれからしなければならない仕事や楽しみ事を列挙する。「半ば出来上がった子供の頭、アフロディテ、森の葉の枝、音楽、仕事、家庭的な断片、そのなかにはあらゆる永遠の真実と美の秘密が宿る。すべてを予言している！」(65)。アフロディテや半ば出来上がった子供の頭の像は愛や母性を暗示する。「家庭的な断片」「部屋中にちらばったもの」は「昼の日光」(65)に属する。

他方、コールの女性像については、「このものを言わぬ悲しみの顔は夜の世界に属する」と述べられる。中流階級の女性は昼の光のなかで、母性と家庭生活を享受し、労働者階級の女性は夜の暗闇のなかで精神的かつ物質的飢餓に苦しむのである。

しかし、コールの女性労働者像には救済の可能性が含意され、小説は次のよ

うに終わる。「祝福の手のように冷たい灰色の光が突然その頭に触れた。そして手探りをする腕が雲の切れ間を通して、極東を指さす。そこではちらちらとかすんだ深紅のなか、神が暁の約束を定められた」(65)。光や暁は聖書では神の栄光や救世主イエス・キリストを表す。ここに中流階級に属する語り手や作者デイヴィスの感傷的なキリスト教が読み取れることは否めないものの、明るい未来への希望が示されている。

コールの女性労働者像には、作者ヒューの魂が込められており、語り手は「コールを彫刻した死者の精神」「オオカミ (wolf, Wolfe) のような顔」(64)が彼女を見つめると言う。そこにはヒューの「挫かれた人生、強烈な飢餓、未完成の作品」(64)がある。ヒューは窃盗の罪で投獄され、監獄で自殺する。しかし、自ら残したコールの女性労働者像という芸術を通して、ヒューは救われるのである。

デボラもまた、信仰によって救われる。デボラは、その名の由来を聖書の預言者に持つが、出獄してからはクエーカー教徒の女性によって救済される。デボラに救済の手をさしのべるクエーカー教徒の女性は、信仰や道徳改革に基づく社会改革についての作者の意図を反映しているように思われる。彼女はフレンド会コミュニティでデボラを慰め、新生活への希望を与える。ヒューが産業資本主義による搾取の犠牲者として死んでいくのに対し、デボラは救われる。

ジェイン・ローズ (Jane Rose) は、小説最後に描かれるクエーカー・コミュニティは環境決定論の現実を肯定するもので、個人の精神が栄えることの出来る肯定的環境を社会が創造出来ることを主張していると指摘する (21)。「体の曲がった老女」デボラは、最後は「フレンドたちの集会所」で「謙虚な場所」(63)を占め、人々から愛されて静かな生活を送ることになる。

また都市を離れ、農業的な田舎での共同生活を理想とする原理が働いている。いかに環境が個人の肉体や精神にとって大切かを示すものであり、よりよい環境を作り上げることの重要性が強調されている。そしてこの最後の場面はデイヴィスの小説の多くに見られる社会改革の意図が「女性的原理、感傷的な神学、精神的高潔さ、そして農業的家族共同体」(Rose 21)に基づいているこ

とを示している。

終わりに

デイヴィスの「製鉄工場の生活」は、アメリカにおける産業資本主義初期の仕事場に関する環境問題——汚染、安全、健康、衛生、貧困、ジェンダーなどを扱っている。シンクレアの『ジャングル』がシカゴの食肉加工工業地区で働くリトアニアからの移民の体験を通して、当時の劣悪な労働環境と非衛生的な加工食品製造の過程を告発し、それが一つの契機となって1906年の純粋食品・薬品法が成立したことはよく知られている。デイヴィスの作品もまた、労働組合の結成や賃上げ闘争、有害物質排出規制の誘因となった。

ティチはデイヴィスが「製鉄工場の生活」で提起した問題——階級間の衝突、労働条件、ジェンダー・アイデンティティ、芸術の教育と創作、移民、技術革新、そして精神的価値は説得力のあるものであり、それらは21世紀初頭においても、国家の最も重要で、当今の困難な問題を扱っていると結論づける(25)。デイヴィスによって提示された仕事場を取り巻く環境問題は、21世紀の今日の問題でもあり、作品は環境問題に一石を投げ続けているのである。

引用文献

Abrams, Robert E. *Landscape and Ideology in American Renaissance Literature: Topographies of Skepticism*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.

Buell, Lawrence. *The Future of Environmental Criticism: Environmental Crisis and Literary Imagination*. Oxford: Blackwell, 2005.

Davis, Rebecca Harding. "Life in the Iron Mills." *Life in the Iron Mills and Other Stories*. Edited and with a Biographical Interpretation by Tillie Olsen. New York: Feminine P, 1972. 9-65.

- Dimock, Wai Chee. "Class, Gender, and a History of Metonymy." Eds. Wai Chee Dimock and Michael Gilmore. *Rethinking Class: Literary Studies and Social Formations*. New York: Columbia UP, 1994. 57-104.
- Eisler, Benita. Introduction. *The Lowell Offering. Writings of New England Mill Women*. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1977. 13-41.
- Harris, Sharon M. *Rebecca Harding Davis and American Realism*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1991.
- Johnson, Claudia Durst. *Labor and Workplace Issues in Literature*. Connecticut: Greenwood P, 2006.
- Lang, Amy Schragar. "Class and the Strategies of Sympathy." Ed. Shirley Samuels. *The Culture of Sentiment: Race, Gender, and Sentimentality in 19th Century America*. New York: Oxford UP, 1992. 128-142.
- Melville, Herman. "The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids." *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860. The Northwestern-Newberry Edition*. Ed. Harrison Hayford, Alma A. MacDougall, G. Thomas Tanselle and Others. Evanston: Northwestern UP and the Newberry Library, 1980.
- Olsen, Tillie. "A Biographical Interpretation by Tillie Olsen." *Life in the Iron Mills and Other Stories*. Edited and with a Biographical Interpretation by Tillie Olsen. New York: Feminine P, 1972. 67-174.
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Cambridge: Harvard UP, 1989.
- Roman-Royer, Judith & Hedges, Elaine. "Rebecca Harding Davis 1831-1910." *The Heath Anthology of American Literature*, Fifth Edition. Vol. B. ed, Paul Lauter. New York: Houghton Mifflin, 2006.
- Rose, Jane Atteridge. *Rebecca Harding Davis*. New York: Twayne, 1993.
- Sinclair, Upton. *The Jungle*. Edited with an Introduction by Christopher Phelps. New York: Bedford/St. Martin's, 2005.
- Tichi, Cecelia. "Introduction: Cultural and Historical Background." Rebecca Harding Davis. *Life in the Iron Mills*. Boston: Bedford/St. Martin's, 1998. 3-25.
- . "Social Reform and the Promise of the Dawn." Rebecca Harding Davis. *Life in the Iron Mills*. Boston: Bedford/St. Martin's, 1998. 203-208.